

Monthly Report

Vol.177 / 2021.JAN
(月1回発行)

2人が大学日本代表入り／軟式野球部



日本代表に選ばれた持館

軟式野球の大学日本代表に本学から持館理登（もったてりと、体育3年）が選ばれました。さらに森夏美（運動栄養3年）も主務として代表入り。2人は「日本代表チームに少しでも貢献したい」と誓っています。

持館は福島県相馬高校出身の外野手。174㌢、72㌔の右投げ左打ちでシャープな打撃が持ち味です。東北地区大学選抜チームにも選出された実績があります。「全国各地から選ばれた選手たちとプレーできる。学べるものは多いし成長したい」と意気込んでいます。

全日本大学軟式野球連盟が選んだ代表選手は総勢23人。東北地区からは持館のほかにも2大学から合わせて3人が入りました。森は軟式野球部の主務としてチームを下支えしています。本年度、コロナ禍のなかで地区の独自大会開催へ向けて尽力した功績が高く評価されました。森は「とても光栄。貴重な経験であり、いろいろなことを吸収していきたい」と話しています。

日本代表チームは2月20、21の両日、静岡県伊東市内で行われる全日本大学親善試合に出場し、社会人チームと対戦する予定です。

<報告：軟式野球部>

主務として日本代表
入りした森



<目次>

・学生2人が大学日本代表入り／軟式野球部	1
・不思議なご縁～十五年前は仙台大学にきた交換留学生でした	2
・宮城県知事に全日本体操、種目別「床」2連覇を報告／南一輝 ・トライ！20番台オンラインミーティング！を開催	3
・V1チームにアナリストとして同行／スポ情3年倉茂さん（男子バレーボール部） ・「日本水泳・水中運動学会2020年次大会」において渡邊泰典講師らの研究チームが研究奨励賞を受賞	4
・「佐藤実季看護師がJICAの映像教材作成に協力」 ～途上国の母子保健改善へ尽力～	5
・ATCとしての一步とコロナ禍について	6
・2019年度第14回『仙台大学体育施設管理士』認定証授与式を開催	7
・芝草通信 NO. 21	8
・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 33	9

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

不思議なご縁～

十五年前は仙台大学にきた交換留学生でした

仙台大学 講師 頼羿廷

昨年の4月から仙台大学に講師として着任しました頼羿廷（ライ イテイ）です。着任後お話をした学生さんや教職員の方々はまだ多くはありませんので、このコラムを通して自己紹介とご挨拶をいたします。

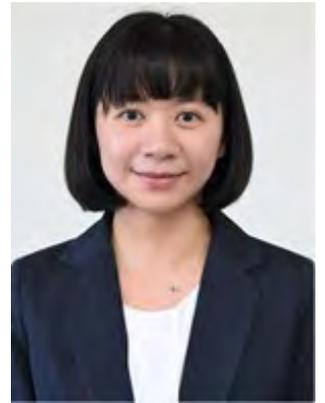
現在は大学院に所属し、院生指導のほかは、体育学における共通基礎科目の概念や身体活動全般のカリキュラム、そして教職課程認定に関連するカリキュラムなどについて研究しています。

本学への着任については不思議なご縁を感じているのですが、私は、15年前、6週間の短期交換留学生として仙台大学に学んでいるのです。在学中は、斎藤浩二先生の剣道の授業に参加していたことがとても印象に残っていますし、斎藤先生のお宅にホームステイした思い出は今も鮮明です。また、佐藤幹男先生（当時）が私の研究テーマに合った東北大学の研究室を紹介してくださり、東北大学大学院教育学研究科に進学する機会を得ることができました。同大学院では、博士学位論文「日本における教職員人事評価制度に関する研究」をまとめ、その後、東北大学高度教養教育・学生支援機構の助教として3年間の経験を積んで本学に着任しました。

あの時は、ほんの6週間の仙台大学留学でしたが、私の人生が大転換をする契機となりました。あれから15年の月日、一生懸命頑張っであつという間に過ぎました。今は、日本の仙台大学で教鞭をとるようになり、その深いご縁をしみじみと感じています。これはすべて2006年の夏、仙台大学で良い先生たちに巡り会えたおかげだと信じています。

私の人生のターニングポイントを作ってくくださった仙台大学！私は本学で働けるようになったことを心より嬉しく思っています。微力ながら恩返しとして仙台大学の学生さんに対して、進路指導や留学案内など積極的に人生の道が拓けるような助言をさしあげたいと思います。どうぞ皆様、引き続きご指導とご協力のほどよろしく願いいたします。

（補足として以下の資料で簡単な経歴を紹介させていただきます） R2年度新任教員発表会資料より



台湾での経歴 (1984-2006)

- ・台北生まれ、新竹エリア育ち。実家は桃園
- ・母の影響で小学校の頃から教員を目指した父の影響で大学卒業後日本へ留学しました
- ・2002 台東師範学校 初等教育学部入学 (現・台東大学教育学部)
- ・2006 当時台湾の教員養成制度では、師範学校の卒業生は学校現場で1年間の実習期間を経て教員になる仕組みでした。給料つきで5年生の担任を担当させていただきましたが、自身教員としての能力の足りなさを痛感していた一年間でした。

仙台での留学生活 (2008-2017)

- ・仙台大学の佐藤幹男先生（当時）は私自身の興味関心に合った研究室を紹介してくださったおかげで、東北大学教育学研究科・水原克敏先生の研究室に勉強させていただきました。
- ・研究テーマ：日本の教員評価制度について
台湾では教員の自主性と専門性が主張され、人事管理としての教員評価制度の実施が反対された。そのため、日本の教員評価制度の実態と課題について興味関心を持ち、研究しよう決めました。
- ・2011年に博士課程に進学してさらに日本語、研究の壁とぶつかり、気分転換（≒現実逃避）としてジム、料理教室に行くようになりました。それで運動の習慣を“自然に”身に付けさせられ、ヨガ・水泳・ゴルフ、料理・手ごねパン・和菓子/洋菓子作りといった研究外の第2のスキルができてしまいました(笑)

日本へ留学のきっかけ (2006)

- ・**台東大学交換留学生として仙台大学に短期留学（6週間）**
- ・当時、主に接してくださった先生方
 - 佐藤幹男先生 (ホームステイ。うまい運動に連れていただき、人生初のすし身体験でした！)
 - 佐伯洋昌先生 (セッティングへ観光、十割そばという当時の私にとって大人の味(大人しきかわからない美味しさを味わわせていただきました。)
 - 斎藤浩二先生 (ホームステイ。先生の息さまとお母さまは私たちに宿舎の寄付してくれて、ご家族と一緒に「帰国途」に行きました。台東では本番で温泉に入るのが実況ですが、そのような実況を聞いた温泉体験でした！)

前職での経歴について (2017-2020.03)

- ・東北大学 高度教養教育・学習支援機構 (高等教育開発部門 助教)
 - 担当授業①「現代社会における教育問題を考える」(基礎ゼミ)
 - 担当授業②「社会に対する学校教育の意義と役割を考察する」(基幹 科目-社会論)
- ・東北大学 学習支援センター(センター員)
 - 学生同士(先輩学生と後輩学生)の学び合いの力を活かして、主に学部1・2年生(全学教育段階)の学びをサポートする組織です。
 - センターの専属教員として、先輩学生を指導者としての育成(分かる・教えられる、一方的に教えるのではなく考えさせること)と初年次学生に授業外の学び機会を企画し提供するとは主な業務でした。また、留学生向けの日本語学習の支援も!
 - 毎日物理、数学、化学の先輩学生さん達(学部3年次からドクター2年次まで毎年約10名前後)と関わっており、文系出身の私には刺激いっぱいの日々でした。

Monthly Report

2

Vol.177 / 2021 JAN.

宮城県知事に全日本体操、種目別「床」2連覇を報告／南一輝

12月10日～13日（日）群馬・高崎アリーナで行われた体操の全日本選手権で種目別・床運動で、2連覇を果たした体操競技部の南一輝（体育3年）が1月26日（火）、宮城県庁で村井嘉浩県知事に喜びの報告をしました。

東京五輪への出場を目指す南は「今は、コロナ禍で大変な状況となっていますが、自分がやるべきことは決まっていますので、その目標（東京五輪）に向かって頑張ります」と更なる飛躍を誓いました。

村井県知事は「東京五輪は必ず開催すると思いますので、体調を万全にして、まずは国内選考会で勝って、オリンピックに出場してほしいと思います」と南を激励し、今後の活躍にエールを送りました。



写真左から高橋仁副学長、朴澤泰治理事長、村井嘉浩県知事、南一輝、鈴木良太監督、遠藤保雄学長

トライ！20番台オンラインミーティング！を開催

1月22日（金）に学生支援センター主催（キャンパスライフサポートグループ）による、本学一年生を対象のコロナ禍での学生同士の仲間作りのきっかけを作ることや、オンライン上での発言に慣れる場を作ることなどを目的としてとしたオンラインミーティングを開催しました。

事前にGoogleフォームによるアンケート調査を行い、決定された話題TOP10を時間帯に分けて部屋を作成し（同時刻に3部屋同時進行）オンラインで学生同士が決められた話題について、最大30分語り合います。

例年は対面イベントを開催していたため、このようなオンラインでの取り組みは初の試みでした。しかし、イベント終了後には「今日参加してみて良かったです。」「楽しかったです。」などという声があり、今年度はコロナ禍によりオンラインでの授業が主となり、入学当初から大学生活に不安を抱える学生が多くいた中で、今回の活動はとても充実したものになり、楽しそうに対談している姿が見られ大変良かったと感じています。

参加者は以下の通り

- ・一年生 44名
 - ・学生支援センター職員4名
- 総計 48名

<報告：学生支援室>



V1チームにアナリストとして同行／スポ情3年倉茂さん（男子バレーボール部）

本学男子バレーボール部で、アナリストとして活動している倉茂涼さん（スポーツ情報マスメディア3年）が今シーズン、V.LEAGUE Division1（Vリーグ）に所属するヴィクトリーナ姫路にチームアナリストとして同行しています。

大学での活動もしっかり行いつつ、夢実現への第一歩として週末は全国各地の試合会場でアナリスト活動、さらに平日は次週対戦予定の分析を行うハードなスケジュールです。

初めて女子チームの分析を行っていることで、これまでになかった考え方、バレーボールに対する見方など、戦術に関して変化が見えてきているようです。

この経験を本学男子バレーボール部に還元し、チームの更なる強化と本学科の情報分析分野での発展に貢献してくれると思います。

今年も本学男子バレーボール部の応援をよろしくお願いします。

○倉茂さんからのコメント

女子バレーは戦術的な部分が男子バレーよりも当てはまる事が多く、その為、アナリストの責任も大きくなります。自分はまだまだチームの勝利には貢献出来ていないですが、自分に出来る事を精一杯頑張りたいと思います。

トップレベルで得られた経験を、本学男子バレーボール部に還元していきたいです。

<報告：男子バレーボール部>



「日本水泳・水中運動学会2020年次大会」において渡邊泰典講師らの研究チームが研究奨励賞を受賞

渡邊泰典講師らの研究チームが「日本水泳・水中運動学会2020年次大会」の発表で研究奨励賞を受賞しました。日本の水泳や水中運動に関する学術活動は活発で、国際的な評価も高いことが知られており、本学会はその中心的な学術団体です。

初のオンラインでの開催となりましたが、オリンピックメダリストやその指導者、国際的に活躍する研究者だけでなく、地域で水泳・水中運動の指導に携わる方も多数参加し、活発な情報交換と議論が繰り広げられました。

この度、受賞した研究内容は、いわゆるカナヅチの人が泳げるようになるための新たな水泳補助具を試作し、その効果を検証しました。

渡邊泰典講師の話

人間は元来、下肢が重い為、水中では脚（足）が下がります。泳げない人は、このことが原因でうまく前に進めないのですが、これを解決する方法として補助具の「ヘルパー」を用いるのが一般的です。従来、水泳指導で広く使用されているヘルパーは、腰部（ウエスト）に浮力体を巻き付ける仕様になっていますが、これが場合によっては下肢を更に沈ませる可能性がありました。

今回の研究では、骨盤側方から大腿側方にかけて浮力を付加する新型ヘルパーを試作し、それを着用することで、水泳が不得意な人のパフォーマンスがどのように変わるかを試行的に検証しました。

その結果、新型ヘルパー着用により、水泳不得意者は即時的に長く浮けるようになり、ゆっくりたくさん泳げるようになりました。

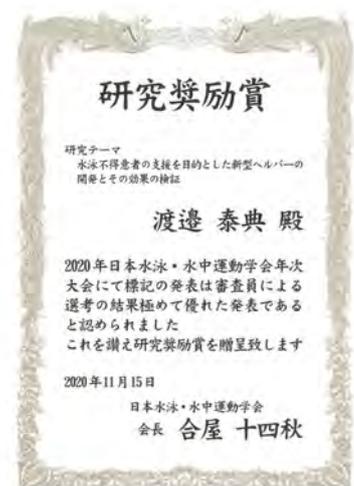
「泳げないから水泳きらい」を「泳げないけど水泳たのしい」へ、ひとりでも多くのひとに水の中で活動することの面白さを知ってもらえるように、今後さらに改良を進めていきます。

この研究に協力して下さった皆様に深く感謝申し上げます。

【研究奨励賞】 演題：「水泳不得意者の支援を目的とした新型ヘルパーの開発とその効果の検証」 渡邊泰典（仙台大学）、森山進一郎（東京学芸大学）、若吉浩二（大阪経済大学）

本学会は2020年11月14、15の両日、日本福祉大学（愛知県）で開かれました。

<学術会事務室>



「佐藤実季看護師が JICA の映像教材作成に協力」 ～途上国の母子保健改善へ尽力～

仙台大学の健康管理センターに勤務する佐藤実季看護師は、2016年～2018年の2年間、国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊として東アフリカのウガンダへ派遣されました。派遣先では医療関係者と共に医療環境向上を目指して活動してきました。

2021年日本でJICAによる研修会が開催される予定で、事前に母子保健について学習してもらうための映像教材作成を依頼されました。研修内容は、途上国の母子保健に関連した医療関係者・保健省行政官を対象とした「アフリカ地域 母子保健実施管理」についてです。現在の職場経験も活かしながら健康管理センターの概要、施設紹介、業務内容について英語で作成し収録しました。

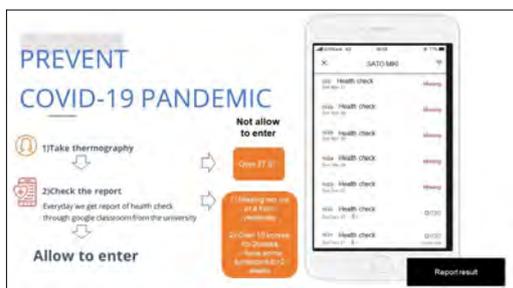
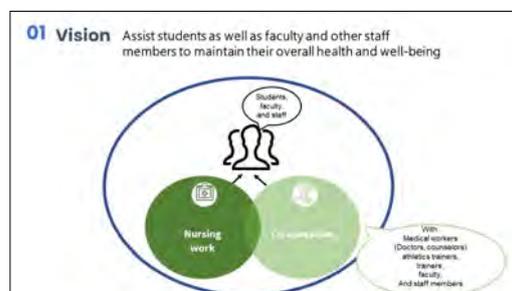
「久しぶりの英語での報告のため大学の教職員にもご協力をいただきながら、英語での作成収録を終えることができ、本当に感謝しております」と佐藤さん。

佐藤さんが作成した資料には、仙台大学が日本で有数のスポーツ大学校として知られており半数の学生が部活動に励んでいること、それ故体育の授業や部活動での怪我や体調不良者が多くいること、健康管理センターは学生の健康の保持増進を支援することを目標に日々業務をおこなっていること、目標を達成するためには医療関係者、AT、臨床心理士や他教職員との連携が不可欠であること等が記載されています。

佐藤さんは映像教材作成に関わったことで、改めて連携、協力が重要だと認識されたそうです。「私たちは日々健康管理センターで業務を遂行しています。自ら健康管理センターを利用する学生は、直ぐに処置に繋ぐことができます。しかし授業中や部活中に学生が怪我や体調不良を起こした場合は、現場にいた教職員が寄り添い私たちに繋げてくれます。教職員のサポートから、健康管理センターはさらに医師やAT、臨床心理士と連携しながら適切なケアに繋ぐことができます。」

また、作成資料の中には本学の新型コロナウイルス感染拡大予防の取り組みも一部紹介しています。「入構管理システムを構築し半年が経過しましたが、学生個々の健康意識が高まったように思います。現在は紹介している内容よりも更に簡便で高性能な入構管理システムへと改良されましたが、この入構管理システムも教職員の協力なしには作成出来ませんでした。世界的に新型コロナウイルス感染症の拡大が収まりません。途上国で医療活動をしようとする様々な物が限られ、水でさえ入手困難です。しかし連携協力することで困難を乗り越える策は必ず見つかると思っています。」

途上国と先進国では環境が異なる部分が多々ありますが、佐藤さんは途上国に2年間いた経験を活かして教材作成に挑んだことが伺えました。途上国の医療関係者・保健行政官に佐藤さんの想いが伝わることを祈っております。



ATCとしての一步とコロナ禍について

昨年6月にATC(米国アスレティックトレーナー資格)を取得し、それまでの道のりについて昨年6月と7月のMonthly Reportでご紹介いただいた村上泰司です。

その後、わたしはATCとして経験を積むために、米国のメインランドで学ぶことを決意し、2020年8月にオクラホマ州ノースイースタン州立大学(以下: NSU)へ移動、現在男子サッカー部担当のGraduate Assistant ATCとして大学院の授業をこなしつつ、働いております。今回、コロナ禍において米国で働く意味・難かしさなどに関し、お伝えできれば幸いです。



・コロナ禍におけるNSU体育局/ATルームの対応

NSUにおけるコロナ禍の対応計画は主にATルームのヘッドアスレティックトレーナーが担当しており、体育局長や提携している病院とコミュニケーションを取りながら作っております。その計画をもとに私たちGraduate Assistantは日々の活動を行っております。具体的には、練習前の体温チェック、アプリを通じた症状のチェックなどが挙げられます。ほかにも、ATルームの使用人数を制限し、アポイントメント制とすることで選手間で広まらないような工夫もしております。

今年の春学期からは、昨年行えなかったスポーツを含め本格的なシーズンが始まります。試合開催にあたり、所属するカンファレンス(地域リーグにあたるもの)の規定に則ったコロナウィルスに向けた対応を行っております。その規定を基にATルーム側でも試合前の対応を考えております。私たちの所属するカンファレンスでは、PCR検査ではなく、その場で結果が分かる検査を採用しております。この検査は取り寄せが可能で、私たち自身で検査することが出来るので、試合があるごとにATCがこの検査を行っております。

・サッカー部を担当する魅力

私が担当しているサッカー部は国際色が豊かで、イングランド、スウェーデン、カナダ出身など国の出身によって英語の発音が異なるため、話していてとても興味深いです。

特にイングランド出身の選手は出身地のクラブに強い愛着があり、それについて話を聞くのが楽しくサッカーの話題以外にも、日本のアニメが好きな選手も多くいるため、時々、日本語を教えたりもしております。

様々な国出身の選手が集えど、国境を乗り越えて一つにしてくれるのはサッカーの一つの魅力であると日々実感しております。

・コロナ禍を現地で経験してみる

実際にATCとしてコロナ禍で働いて感じたことは、感染予防を発信する側とそれを受け取る側のギャップがまだあることです。多くの医療従事者が研究を重ねどれだけ良い対策を考えても、その情報を受け取る側が真剣でなければ結局意味がありません。昨年の秋学期にはオクラホマ州全体がレッドゾーンと呼ばれる感染者数が最も集中した州の一つになりました。NSUを含め多くの大学スポーツが中止になる中、地域の高校では通常通りスポーツが行われました。たまたま通りかかったソフトボールの試合を遠目に見ると、マスクを着けず密集した状態で観戦している保護者も多く、レッドゾーンになって当たり前前の状況でした。加えて、昨年NSUにおいても選手間でのパーティーを行い多くの感染者を出し、対応に追われることもありました。

コロナ禍は選手のパフォーマンスにも影響を与えております。感染した選手の中には喘息持ちの選手もおり、途中で練習を中断し吸入器を頻繁に使用する場面も多々見受けられました。ほかのスポーツの選手では感染したことによって5キロ以上体重が減少したことに加え、ランニングさえままならない状況です。

コロナウィルスは様々な形で爪痕を残し、私が想像していた以上のものでした。新たな変異ウィルスも発見され先が見えない状況ではありますが、変えられるのは自分自身の行動だけです。もう一度、大切な家族、友人、そしてチームメートの顔を思い浮かべながら、感染予防へ向けた行動を考えていただければと思います。そして、私自身も体調管理に留意しながら今後の活動を頑張っていきたいです。



ノースイースタン州立大学のアメフトのフィールドからの風景

昼休みなどを利用して暖かい日にはフィールドのベンチで風にあたりながらリラックスしています。景色も良く、秋口には紅葉を眺めながら、久しぶりの秋を楽しんでおりました。ここでは、アメフトの練習だけでなく、サッカーの練習場としても使われます。



タレクアの街並み

飲食店が充実しており、休みの日を利用してカフェで課題をしたり、夜ご飯を時々テイクアウトして様々な味に触れております。



練習の風景

サッカー部は朝練をメインに行い、午後にトリートメントを中心に行っています。今学期から本格的なシーズンが始まるので、選手の表情も徐々に真剣になってきました。練習における役割は、水分補給の補助と外傷の対応等です。練習前にはテーピングを巻いて練習に備えています。

2019年度第14回『仙台大学体育施設管理士』認定証授与式を開催

<32名が資格取得>

12月18日(金)LC棟1階において2019年度第14回『仙台大学体育施設管理士』認定証授与式が行われました。遠藤保雄学長から令和元年度に合格した32名のうち授与式に出席した4名の学生に認定証を一人一人に手渡しました。本来4月に開催していましたがコロナ禍のために延期になっており、今回やっと実現できました。

<本学の授業で修得できる資格>

体育施設管理士は体育施設の維持管理・運営に必要な知識・技能を認定する資格です。この資格に必要な科目は本学において修得することができ、科目修得後、公益財団法人 日本体育施設協会が学内で実施する資格認定試験に合格した者に『公認体育施設管理士』の資格が付与されます。日本体育施設協会は今まで64回の養成講習会(50余年間)を通してこの資格者を約11,500名認定してきました。本学は同協会の体育施設管理士認定校になって2020年度で15年目となります。累計583名の有資格者を養成し、授業を通して資格認定者の養成を継続しています。

<遠藤保雄学長の講評>

「3月に既に認定されていた資格認定証を、対面授業が開始されたことにより本日やっと皆さんへ交付することが出来、私も心より嬉しく思います。

体育・スポーツ科学を学んで、将来どの様に社会に貢献するかは、色々な道が有り、トップアスリートを目指す道、そのアスリートを育てるコーチになる道、アスリートの体調管理をするトレーナーになる道、体づくりのスポーツ栄養を支援する道を進む人もいます。体育施設はアスリートにとり、また、体育・スポーツを行う多くの国民(若い人からお年寄りまで生涯スポーツを行う人達)にとり非常に重要なインフラであると思います。そういう事に関して皆さんがきちんとした基礎的な知見を授業で体得し、それをベースにして社会に貢献していくことは非常に重要だと思います。ただ、学校で学んだ事と現場で施設を使う方のニーズに応じてきちんと合った形で施設管理をしていく事にはちょっとズレが有ります。そこは皆さん現場のニーズを踏まえて、ニーズに即したそしてかつニーズに振り回されないで、こういった正しい使い方が有りますよと呼びかける。皆さんが捉えた資格をベースに社会貢献して行ってくれば良いと思います。今後色々な形でこの資格をベースにして活動していくことを強く希望しています」と述べられました。

<資格認定証を授与された学生からの感想>

Aさん：今まで私達が育ってきた学校にある体育施設などがいろいろな人たちの手によって管理とか維持されていることを授業を通して実感しましたし、維持されていくための管理知識がこれ程まで膨大な物なのかを授業を通して学ぶことが出来ました。最後に資格として形に残るものを手に入れられたので大変うれしく思います。

Bさん：就職内定先は東京のホテルですが、ホテルの運営管理職に4月から就業することになっています。授業を通して学んだ施設管理がホテルの運営に生かせればよいと考えて頑張っていきます。

Cさん：この資格を大学に入ってから知ったのですが、授業を受けていくにつれて面白い内容だと感じ、資格も取りたいと思って受験しました。来年地元でこの資格を生かして仕事をしていけたらと思っています。

Dさん：グランディ・21などの大きな施設を利用することが有りますが、施設に多くの人が携わっていることを知り私もそれに興味があり、スポーツ施設管理の仕事を追求していきたいと考えています。

<社会に出て資格取得のアピールを>

感想を聞いて、皆さんは授業を通して十分に勉強した様子がわかりました。社会人になった時の対応として、世の中では『体育施設管理士』の資格を知らない方が多いので、自ら説明してください。自分は授業の中でこの様な事を学んだとアピールしてください。施設は本社の所在地にある建物その物が施設ですし、営業所や支店なども有り、スポーツ施設が無くとも色々な形で施設に関わることが有りますので、授業を通して学んだ事が十分に生かせるように活躍してください。

また、この資格を説明する時に内容が相手に伝わるよう自己表現を上手に考え、シュミレーションを30秒タイプ、1分タイプ、3分タイプといくつか作成してみてはいかがでしょうか？自分からこの資格を積極的にアピールし、是非社会人として頑張ってください。

<資格取得卒業生の活躍>

過去の例を掲げますと、Jリーグの正式試合会場として利用されるピッチの維持管理を担当する建設会社に就職した先輩も数名おります。スポーツに長く関わり、アスリートの事をよく理解して、体育・スポーツ科学を学んだ体育大学の卒業生が天然芝生ピッチを維持管理することは、農学を専門コースとして学んだ学生とは一味違った適性を発揮できると社会で認められるようになって欲しいと願うところです。

<報告：体育施設管理コンサルタント 小島文雄>



授与式の様子及び記念写真

芝草通信 NO. 21

担当 : 体育施設管理コンサルタント 小島文雄

2月の芝生管理について

噴水周りの高麗芝生(暖地型日本芝生)と第二グラウンドバミューダグラス(暖地型洋芝)は枯れ葉色となり生育が止まっています。第二グラウンドの寒地型洋芝(南側はトールフェスク+北側はペレニユアルライグラス)は、気温の低下と共に生育が鈍ってきます。

【参照】月間維持管理については、Monthly Report Vol.164/2019.DEC から毎月掲載済み

1. 第二グラウンドの寒地型洋芝について

1月6日は下記写真の様に全面雪に覆われており根雪状態です。本来は寒風の防風対策や低温対策として養生シートで覆います。本学では初期のころは設置した時期もありました。シートの設置・格納には時間と人手がかかり、また速やかに段取り替えや準備が困難なこともあり、最近では使用していません。

根雪状態の芝生グラウンドの利点：厚さ5cm以上になるとシートの代わりに地温の低下を防げます。厚さ10cm以上の時は雪の上で使用・練習できます。

根雪状態の芝生グラウンドの欠点：完全に雪が溶けて芝生内の水分が低下し乾燥するまでは、表層が荒れて芝生が剥がれてしまうために使用・練習できません。

積雪の状況と芝生下層の湿潤状態により開放できる日程は変動しますが、なるべく練習日に開放をしていきたいと考えています。そのうえで現在の寒地型洋芝が全滅状態から半分程度までに壊滅したときには春先に新しい寒地型洋芝を播種します。種子からの生育を見守るより、なるべく今の休眠中の寒地型芝草を持続して、春先の気温が上昇したときに芝草の生育状態が良好になるのを待つことが良い方法です。暖地型洋芝バミューダグラスを播種する適正気温は6月下旬から7月上旬ですので、短い期間の寒地型洋芝の活用となります。

冬季の全国の天然芝生グラウンドとの比較

関東以西の殆どが暖地型洋芝を中心として、冬季にウィンターオーバーシーディングで寒地型洋芝と入れ替えてます。温暖な気候は寒地型も休眠せず、生育に地域差はありますが緑色になっています。同じ気温の仙台にあってもYurtecスタジアム、楽天生命パーク野球場やグランディ・21のスタジアムは緑色をしています。これらのスタジアムは試合開催の為に冬季はシート設置など十分な養生期間を取っているため、練習などは出来ません。また種子で繁殖する洋芝は、種子の散布量や施肥量を多くしています。Yurtecスタジアムと楽天生命パーク野球場は地下に地温コントロールシステムを設置しています。

参考までに、札幌スタジアムはサッカーピッチを設置しているステージごと屋内・屋外に出し入れしています。野球などで使用するときはステージごと屋外に移動しますが、しっかりと養生シートを覆い被せて保護します。移動式「ホヴァリングサッカーステージ」は厚さが1m40cmで総重量は8,300t有り8台の大型ブローアが吐き出す空気の圧力により自重の9割を支え、残りの重さをステージ内部の34個の車輪に掛けて4m/分の速度で移動させます。旋回に25分、移動に50分かかり費用は約50万円です。アンダーヒーティング装置は電熱線を使用しています。屋内に留めおくと十分な自然光が得られずに光合成が阻害されたり、自然風が見込めずに芝草が蒸れた状態になり病害が発生しやすくなったりします。そのリスクに注意しながら利用状況に合わせて、通常は4~5日間ごとに屋内・屋外に出し入れしています。



写真1 第二グラウンド、ラグビー・アメリカンフットボール場天然芝生
2021年1月6日撮影

「高校スポーツの安全を守る」 Vol. 33

担当：小野 勇太 助手

川平ATRがこれまで実践してきた仙台大学附属明成高等学校へのAT・S&C授業もついにオンライン授業を実施致しました（写真①～④）。オンライン手段はZoomを利用。ライブ配信で実施し、高校生達は普段とは異なる環境に興味関心を持ちつつ、AT・S&Cによる専門的な内容に対し、食らいつくように必死にメモを取る姿が印象的でした。回収したレポート用紙にはびっしりメモが書いてあり、感想として、生徒たちに有益な内容となっているコメントが多数挙げられたことは、担当している我々として喜ばしい限りです。

今回は一つの教室に生徒を集めるという形でのオンライン授業でありましたが、遠隔授業ならではのメリット・デメリットを我々スタッフ、高校教員、生徒が認識を持つことができました。このことを今後大きく活かし、AT・S&C授業の更なる質の向上に努めていこうと思います。



①ライブ配信でのオンライン授業（S&C浅野助手）



②質問をする仙台大明成高生の様子



③ライブ配信でのオンライン授業（AT今野助手）



④積極的に授業を受ける仙台大明成高生の様子